

今、カエルなの？オタマジャクシなの？

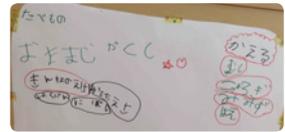
子どもの疑問の中には、大人が答えられないことがたくさんあります。こうした疑問に、真剣に向き合う子どもをどのように支えていますか？子ども自身が疑問や問題を感じ、自分たちで解消しようと取り組む意欲や解決する過程を、保育者が支えることが大切です。この事例の子どもたちは、園内の水田で見つけた生き物がオタマジャクシで、カエルになるという知識があり、飼育を始めます。子どもたちは、オタマジャクシに関わる過程で、自然の生き物のことを知り、飼育活動を通して重要な疑問や問題を抱えながら生き物と向き合い、「科学する心」が育まれる体験をしています。

学校法人押野学園 幼保連携型認定こども園 せんだい幼稚園

5歳児

<飼育の始まりの姿>

- 園庭の水田で、オタマジャクシをたくさん見つけた子どもたちが、見たりすくったりしていた時、Aさんが、「オタマジャクシって、どうやってカエルになるのだろう」と、つぶやいた。この疑問が友達に広がり、話し合っ、保育室でオタマジャクシを育てることになった。
- 育てる前に、絵本や図鑑を見たり、親に聞いてきたりして、オタマジャクシについて調べ、子どもたちだけで話し合いを始めた。Bさんが途中で、保育者に紙が欲しいと伝え、調べたことを忘れないように紙に書き出した。調べたことを基に、飼育箱に土と水、石を入れてオタマジャクシの家を作った。
- 子どもたちは、オタマジャクシが何を食べ、どのような所に住み、どのような家を作れば良いのかを紙に書き、それを廊下に掲示した。掲示することで、他のクラスの子もや3歳児が、オタマジャクシに興味をもつようになった。



場面1.「オタマジャクシかわいそう」

<7月中旬>

- 飼育を始めて1週間後、毎日オタマジャクシを観察していたAさんが、1匹死んでいることに気づいた。3歳児がオタマジャクシに触る姿を偶然見ていたAさんは、「誰かが触って、死んじゃったのかも」と言った。そこでCさんは、「触らないようにしましょう」と言い、紙に「見るだけだよ」と書き、貼り紙をした。また、オタマジャクシの観察に加え、触る子どもの姿にも注意を向けるようになった。
- 給食後、Aさんがオタマジャクシを見て、「お腹、空いているよね」と話しかけた。オタマジャクシは食パンを食べることを知っていたAさんは、パンを持ってきて良いか保育者に尋ねてきた。そこで保育者は、保護者にその経緯を伝え、Aさんの思いを尊重する配慮をした。翌日、Aさんは食パンを少し園に持ってきて、オタマジャクシの餌にしていた。その後、他の子どもたちも家から餌を持参するようになった。
- 毎日観察していたBさんは、「今日も元気に泳いでいるね！でもなんか、前よりオタマジャクシが見えにくくなってきている。Cちゃん見て！オタマジャクシが見えなくなってきたよ」と言うと、Cさんは、「水が汚れているんだよ。ご飯を入れたりしているから汚れてきたのかも」と、応えた。Bさんが、「汚い部屋だと死んじゃうかもしれない！僕たちで綺麗にしてあげよう」と言い、2人で水替えを始めると、その後10人に増え、協力して綺麗な水に替えた。



「保育者の気づきと援助」
「飼育箱をきれいにする」という目的は共有しているが、具体的な方法がイメージしづらいと思ったため、いくつかの道具を準備した。道具を見たことで、きれいにするための方法をイメージし、子ども同士で共有できるようになった。

場面2.「オタマジャクシの頃より泳ぎ方下手だね」

<8月初旬>

- Aさんの、「あっ！オタマジャクシに足が生えてる！みんな見て！」との声を聞き、みんなも足が生えているのを見つけた。Bさんは、「本当だ！足から生えるのだね。僕は手が先かと思った」「すごい、足が生えてる」「足が生えたらもうカエルかな？」「まだカエルじゃないよ。だって手も生えてないし、シッポもまだあるよ」「次は手が生えるかな？それともシッポがなくなるのかな？」など、子どもたちの疑問が多く出た会話だった。
- Cさんが、「なんか、オタマジャクシの頃より、泳ぎ方下手だね」と言うと、足だけ生えているオタマジャクシを初めて見たAさんは、「面白いから、描こう」と言い、紙に描いた。その絵を掲示すると、他学年の子どもも興味をもち、足の生えたオタマジャクシを探すようになった。

「保育者の気づきと援助」
今までの飼育の中で、一番大きな成長(変化)が観察できて、とても喜んでいて。また、予想と違う変化に驚いていた。足だけ生えている姿を見た子どもたちは感動し、絵に描いて記録に残し、他の子どもとも喜びを共有しようとしていた(自由に描画活動ができ、作品を掲示する環境がある)。

場面3.「今、オタマジャクシ?カエル?」

<8月中旬>

- ・足が生えてからも、「足は生えたけど、まだ、シッポはあるよ」「足に指があったよ!」など、子どもたちの観察は毎日続いた。

Aさん:「あっ、今度は手が生えてきてる」

Bさん:「本当だ!手から生えてくるんだね」

Cさん:「やっぱり、私の言った通りだったね」

Aさん:「これは、今、カエルなの?オタマジャクシなの?」

Bさん:「んーと…“オタマカエル”かな」

子どもたちは“オタマカエル”が気に入ったのか、他の子どもたちにも、その名前を教えていた。

それから3日程経ち、いよいよみんながよく知るカエルの姿に変わっていった。カエルだけの家を考え合い、作った。

- ・カエルの家を作った翌日、Dさんが水田でヤゴを捕ってきた。

Dさん:「見て見て!ヤゴ!」

Aさん:「これなんの幼虫?」

Dさん:「ヤゴはトンボの幼虫だよ」

カエルが一匹しかいないのを見て、友達を作ってあげたいという気持ちになり、

Bさん:「そうなんだ!あっ、カエルと一緒に泳がせてみようよ」

Dさん:「いいね!ヤゴと友達になれるかな」

ヤゴとカエルを、オタマジャクシが入った飼育箱に入れた。

5分程観察を続けていると、カエルがヤゴに食べられてしまい、その瞬間を子どもたちは見ていた。

Dさん:「ええー!食べられたー!」

Aさん:「…ヤゴって、カエル食べるの?」

Bさん:「すごい…カエル食べられている…」

カエルの異変に気づいた子どもたちは、「カエルって食べられるんだ」「カエルが食べられているところを初めて見た!」「かわいそう」「すごい」など、いろいろな思いが混ざり合っている様子で、思い思いのことをつぶやきながら、カエルが食べられている姿をじっと観察していた。

- ・Dさんはすぐに図鑑を見て、ヤゴが何を食べるのか調べた。

Dさん:「見て!ヤゴはメダカを食べるって、書いてある。カエルを食べるって書いてないよ」と言った。

Aさん:「図鑑に載ってないものも、食べるんだよ」

Bさん:「カエル…ちょっとかわいそうだけど、ヤゴも何か食べないと生きていけないもんね」

Dさん:「僕たちも、魚を食べているしね」

- ・自然の摂理を感じた子どもたちは、その後、カエルの家について話し合いをした。

「ヤゴと一緒に、駄目だね」「蓋もつけないと、違う虫が食べにくるかもよ」などの考えが出された。Dさんは、みんなの言葉を忘れないように、紙に書いていた。

«保育者の気づきと援助»

- ・予想した通り、シッポがなくなる前に手が生えてきたオタマジャクシを見て、Cさんはとても喜んでいて。
- ・体がどのように変化していくのか話をするうちに、「カエルになったと言えるのはどの姿からか」と、疑問が生まれたが、どちらかを決めるのではなく、自分たちの中で新たな答えを導き出していった。シッポの生えたカエルを不思議に感じながらも、子どもたちは変わらぬ愛情をもって接していた。
- ・オタマジャクシの成長や変化などに気づくと、描いている。他学年の子ども見やすいように描いた絵は廊下に掲示した。



[考察]

- ・目に見える成長(変化)に気づき、「オタマジャクシか?カエルなのか?」という共通の疑問が膨らんだ子どもたちは、身近で観察できる日々が一層楽しくなり、オタマジャクシの動きや変化に常に関心をもって飼育を続けた。子どもたちの気持ちにも大きな変化があり、「もっと知りたい、やってみたい」という思いが芽生えてきたことで、探究が深まる観察になり、「科学する心」が育まれた。
- ・保育者は、「命」について話をしたり絵本を読んだりして伝えてきたが、子どもが繰り返し話を聞くことだけで分かることではないので、「命」についてどのように考えているのか、常々意識している。今回、生き物が生き物を食べる姿を初めて見た子どもたちは、ヤゴと自分たちを重ねているようだった。子どもたちは、この飼育活動を通して、身近な生き物に心を動かされ、命の不思議さや尊さに気づき、大切に育てる気持ちが育まれ、命をつなぐための「自然の摂理」を実感するという、貴重な共通体験ができた。